



# 日本海

新年のおよろこびを申し上げ、本年も昨年以上の活躍を祈りあげます。  
 昨三十八年を回想してみると、行政的には新漁業法の施行、沿岸漁業等振興法の成立などが目につき、研究面では異常冷水やズワイガニ資源の問題などが浮かびました。これらの調査研究については、各水試の方々にかなりご無理をお願いしたにもかかわらず、ご協力をいただきましたことに対して、心から感謝しております。

## 迎春の辞

谷田專治

水産資源の調査研究といつても、口でいうほど簡単なものでありません。資源量そのもの変動も知らなければならぬし、関係水域に來遊する資源量の変動も問題であるし、また、関係海域内での漁場形成の状態もつかまなければなりません。広い範囲にわたり、かつ長い年月をかけなければ解明できにくい点もひじょうにたくさんあります。短兵急に漁業に直結する研究を望まれても、簡単に答をだせない方が多いのが現状でしょう。しかし、多くの人達の協力とたゆまぬ努力によつて、未解決の問題を一つ一つ解決し、将来の発展の足固めをしたいものと念じていますので、一層のご協力をお願いする次第です。

昨年全国的にみられた異常冷水、なかでも山陰・西日本・瀬戸内・房総などで大きい打撃をうけたこの現象は、わずかな予備費でほぼそながら調査がつづけられてきましたが、これが日本周辺の重要魚族の漁場や産卵場に影響をあたえ、また、資源に大きな変動をあたえたであろうことは想像にたたくないので、本年は「冷水塊の水産資源への影響調査」として大きく取りあげられようとしています。大規模の冷水塊の形態やその消長を明らかにし、それが水産資源へあたえる影響を解明することに力がいれられるわけです。

これとかなり関連をもつものに、従来の漁況海況予報事業を拡大強化して、全国的視野にたつた「沿岸沖合漁業漁況海況予報事業」が実施されることになっていきます。現在の漁業は、科学化されつつあるとはいえないものの、まだまだ漁獲に計画性をもたせることはできません。漁場の選択などは経験と勘をたよりにしているのが大部分

発行所  
新潟市万代島  
日本海区水産研究所  
印刷所  
第一印刷所  
株式会社

です。したがって漁海況予報が広い視野から迅速的確に行なわれるようになれば、漁業経営に一段と安全性と計画性が加わってくる筈です。  
 的確な漁海況予報をだすことは、天気予報よりも困難な点が多々ありますが、これまでの資料の上に、これからの新しい計画に基づく資料と迅速な通報組織によつて、一週間か十日くらい先の短期予報から、その年の漁獲見込み、あるいは今後数年間の資源の動向などを、相当程度確実に予報することができるのではないのでしょうか。この事業が拡大強化されるのを契機に、予報精度をたかめる努力を払う一方、研究者も勇敢に予報をうちだしてみるべきではないかと考えます。  
 水産業の発展には生産の拡大、漁獲の確保維持が必須条件ですが、水産業のなかには、生産物の流通問題、漁業人口の問題、漁港の整備などといろいろと困難な問題が残されています。しかしわれわれ研究者としては、まず、徹底した水産資源の調査研究と的確な資源の保護培養をはかることが急務だと思えます。

## 謹賀新年

1964年元旦

日本海区水産研究所  
職員一同

### 主な項目 —第152号—

- ・迎春の辞……………谷田專治
- ・年頭の挨拶……………
- ……………加藤源治、山中一郎、浜部基次
- ・魚探
- ・年頭の夢……………
- ……………杉目宗美、武田初男、脇田二郎、小寺周一、羽根功一、栗田実、井沢康夫、神藤正、吉津綱人
- ・地方水試と人事管理……………尾島雄一

(筆者 日水研所長)

# 年頭のご挨拶

加藤 源 治

皆様にはまたひとつ新しい年を加えられ、いよいよご多幸にたのしくお過ごしのことと思います。おかげさまで当方も無事越年いたしました。今年の新潟はここ十年の間に私が経験したかぎり、雪のないお正月ははじめてのようですし、暮から正月にかけてこの冬ほど太陽にめぐまれた、よいお

天気が続いたこともありませんでした。  
また、昭和三十八年の日本海を中心とした一年間をふり返つてみますと、冷水異変などあつて多事でした。しかし、ひろく世間を眺めてみますと、天災といつたものはあまりなかつたので結構でしたが、防げば防がれた人災が多すぎたようです。だからこの一年はお互いにこのような点をよく反省していき、今年こそ昨年とは違つた意味でよい年となるよう願われて仕方がありません。このことは私どもが毎日の仕事として

いる日本海における水産研究の面でもいえることであつて、今年こそさらに意欲的にめざましい発展ができるよういのりたいためでありませぬ。毎年のことながら、年頭の所感を求められたままに以上一筆いたしました。今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。  
(筆者 日本水産資源部長)

あけましておめでとうございます。今年辰年、長い間池にひそんでいた竜が、勇躍雲を呼んで昇天するごとく、日本海沖合漁業も、その基礎となる研究調査も、大躍進の機が熟したように思われます。

第一に、本年は今までの資料の長い蓄積と分析を土台として、漁況海況の予報が事業化される予算の見とおしがつきました。もちろん、この事業は、一部の人々が考えておられるように簡単なものでないことを私達は十分覚悟いたしております。しかし失敗をおそれては何事も出来ません。我々は、大胆に予報をおこない、実際と比較して細心に分析をくりかえすことによつて、一步一步的に近づきたいと考えております。

## 年頭によせて

第二に、日本海調査の国際色化ということで、これは昨年この欄にも私の前任者下村博士が書かれていましたが、日本海の性状や魚族の分布生態の解明には、ぜひ対岸各国と充分な交流をおこなうことが必要だとかねがね考へております。できることであれば、調査船を、日本海に面する各国の港に寄港させて、補給をかねてそれぞれの地の水産海洋研究機関と交流を図りたいと考えております。

幸い、水研と各地の研究機関とはども「竿さしやとどく」近距離です。お互に「来いというたとて行かりよか」などといわずに「草木もなびく」ようにどんどん交流し「嫁も姑も手に手をとつて」日本海の研究をすすめたいものです。どうやら、正月のお神酒がまわつてオケサがとび出しました。では今年もどうぞよろしくおねがい申し上げます。  
(筆者 日本水研開発部長)

## 新春祝詞

浜部 基 次

新年お芽出度うございます。  
昭和三十八年を回顧しますと、歳晚には但馬漁業センターが果・地元の努力の結晶として竣工しました。

このことの成果は着々と達成されることでしょう。そのように期待し、そのようにならうかと存じますが、思えば多事多難な一年でした。

昭和三十九年、新年は、これを機会に、香住の土地に來たり、また去る研究機関の命運と、有名無名の職縁ある人々の労苦を偲び、静かに降る雪の音に耳を澄ましたいと思ひます。

(筆者 日本水研香住支所長)

## 魚 探

三面川は新潟県北部の日本海に注いでいる小さな河川であるが、昔は毎年秋になると、とても多くのサケが遡河したことで有名であり、徳川時代にはこの川でとれたサケを、江戸幕府へ献上した故記録も残されているほどである。  
最近、日本本土沿岸の各河川では、秋サケの遡上尾数が非常に減つてきたことが一般通念となつており、三面川の場合には、この上流にダムができた結果も手伝つて、成績はあまりよくないようである。

もう四、五年以前のこと、私は同僚と一緒に、その三面川の河口から南方二キロほどのところにある瀬波温泉にかけての沿岸水域を調査したとき、水源二〇メートルぐらいの海底から淡水が湧出している事実をつきとめた。その後、この付近の漁民にこの話をしたら、彼等もこの事実をよく知つており、しかも、この湧水地付近で秋サケが産卵をしたことを確認しているとのことであつた。

サケ科やアユ科の魚が産卵時には河川を遡つて産卵する習性をもつことは、すでに大方の常識であるが、海底で淡水が湧出しているこのような水域でも産卵行動をとる場合があるとすると、秋サケの産卵生態という面から貴重な記録となるわけである。しかし、このことは漁業者から直接に聞いただけであるのだから真偽のほどはわからないので、機会があつたらこの淡水が湧出する水域の位置確認とともに、産卵期間中、果してサケが実際に産卵をするかどうかを丹念に観察してみたものである。  
(逸)

# 年頭の夢

## 漁民の要望に

### そつた調査研究

杉目 宗美

輝かしい新春を迎えた日本海水産試験場の皆々様の御健康と御多幸を心からお祈りいたします。

いつの年も年頭には、今年こそは日本海漁業の発展のために大いに頑張ろう、と思いつながらぬ願望通りにはいかず、むしろ現実には願望とは無関係に動いているような気がいたします。

沿岸漁民は最近のイワシの不漁続き、とくに本年のような異常冷水によるイカの大不漁で喘ぎ通し、このお正月をどうして暮らすか何か切実なものがあるようである。

この零細な沿岸漁民の生活の安定を図るため我々は技術的に本年は何を考え、何をしなければならぬか、と熟々考えさせられる。

将来の日本海の漁業振興対策はどうあるべきか、種々の対策はあると思うが、各海区に共通している方策としては、目下国が強く打ち出している漁民の生産所得の増強と生活の安定化対策として沿岸漁業の構造改善事業を強く推進している。而して生産性の高い漁業への転換及び漁場の利用改善策として

- 一、生産構造の適正化
- 二、漁業の周年操業の確立
- 三、高度技術の導入
- 四、人工漁場造成

五、沿岸漁場の利用改善  
六、沖合漁場の開発  
等が生産向上の改善策として抽象的には打出されている。

生産の対象は言うまでもなく、魚貝藻類である。その漁獲対象物の生活史、習性、生活環境、漁場形成、漁獲変動の原因、洄游移動状況、あるいは資源等については、未知の分野が多く、まだ解明されていない現状である。これらの未解決の問題をそのままにしてどこからどんなふうにも実施するのかわからない、具体性に欠けているような気がする。ただ掛け声だけでは成果は期し難い、しかもやもすると鳴り物入りで、どんどん事業化されそうな気運さえが見受けられる。現在では事業(行政)が先行して技術がひきずられていくような錯覚さえ感じられる。事業として事業化するまでには基礎的な自然科学的な研究過程を裏付けとして実施されるべきである。地方水試として取りあげられるべき研究テーマそのものも一考しなければならぬ。研究は水試の根幹であり、とくに漁況予報は生命であることには贅言を要しないが、とりあげるべき研究は現在のスタッフと設備では研究の出来ないようなもの、研究のための研究というのではなく、我々の研究は漁民の生産から経営というものに、直結した研究でなければ意味がないと思う。

この様な考え方で本年は日本海沿岸、および沖合漁業の発展のため沿岸漁業構造改善事業の企業化、および水産技術改良普及事業発展のためこれに対応するような研究テーマを、とくに小型漁船の経営安定のための調査および漁具・漁法の改良試験並び

に浅海増殖試験等を優先的にとりあげ各県共通のものは共同研究をして、少しでも日本海沿岸漁民の生産の増強に役立たせたいものである。(筆者 青森水試場長)

一九六四年、日本海の皆様あけましてお目出度うございます。

日本海の寧日ない冬の海を眺めるたびに考えさせられるのは日本海の漁獲高の低さであり、これから来る漁業収入の太平洋にくらべ、劣る点である。この原因は数々あるが、その一つにこの海岸にまともに打寄せる「ドトウ」が数えられるのではなからうか。

とくに近時各県が沿岸漁業構造改善を着

手するにあたり、成長株と言われる蓄養殖漁業も太平洋の成功をうのみにして取り入れることの至難も、この波浪に起因するとは各県共通の言葉であり、各水試の技術者をしてお手あげにしている状態ではなからうか。

この秋冬季の波浪を制圧出来ぬものかとみると制圧と云うか、波浪による被害防止策として富山の中層小割式蓄

養、石川の中層定置網など、いずれも波浪の物理学的理論に基づき影響の少ない水深三〇米辺の海中に潜降布没する方法をとって防いでいる。

この制圧を一步進めて有効に利用する方法が案出されたらどれほど日本海はのびるであろうかと、あらぬ夢を画いてみる。

この夢を画くにあたり、この波浪の現在

## 荒波の制圧とその利用

武田 初男

営んでいると考えられる作用ならびに利用可能とおぼしき点を列挙すると

1 岩面に着生する岩のりはこの波浪が岩盤に胞子と栄養分を運搬、たたきつける作用の連続によるものようだ。

2 築堤式養魚池を作るにあたり、波浪の来る頻度の高い北西に面した築堤を嚴重に構築し、これに乗越えて来る波浪により蓄養池の清掃を計り池底の沈み餌魚糞の堆積による老化現象の防止は出来ないものか。

3 冬季の波浪を堰堤内のズイドウに導入、ターピンを設置して簡易な自家発電は如何なものであろうか。

4 先般連絡ニュースにあつた円筒内に魚類を飼育する鶏のバッテリー式養殖のアイデアもこの波浪を利用して円筒内に流れを作ることにより、まんざら夢ではないようだ。

以上思いつくままならべたが蓄養殖漁業の面に意外に利用出来る点があるのでなからうか。勿論人工を加える点では太平洋の比ではないので経費はかさむかも知れない然しそれだけ人智を使う点で進歩的であり太平洋ではまねの出来ない芸当と言えよう。

日本海と四六時中対峙している研究者のなかにはまだまだ良い考えの持合わせがあると思う。本年は是非これらアイデアを出しあつて検討を加え禍を転じて福となしたものである。本年は十二支中で唯一一つの空想の獣、童年、この年にちなんで書いた夢を画いた次第。

(筆者 山形水試場長)

# 漁況海況の的確な予報

脇田 二郎

明けましておめでとうございます。いよいよ我々国民が待ちに待ったオリンピックが日本で開催される一九六四年の新春を迎えました。この記念すべき年を契機に何か水産業の発展のため大いに役立つ仕事にやりがかりたいと思つていたところ、水産庁が本年から全国的な規模で実施する計画をたてている漁・海況の予報業務の予算の見通しがついたので朗報が入つた。

私はかねがね「漁・海況が天気予報のように予報できれば業界に裨益することが大きい」、しかし天気予報が現在のように発達し、確率が高くなるまでには長い年月と相当の努力を要したであろう」と考えていた。

漁・海況の予報は天気予報以上至難なことであり、その実施に踏切るには、相当の勇氣と努力が必要であるが、このチャンスをおぼえ、我々水産試験場は、各水試相互、海区水研・水産庁、業者と密接な連絡をとりながら、一日も早く的確な漁・海況予報ができるようにしたい。過去におけるこれらの資料に乏しい本水産試験場にたいし充分な御協力をいただき、夢の実現が一日も早いことを祈る次第である。

(筆者 秋田水試場長)

観測窓を通して見る海水の色は淡い緑で

神秘を湛え窓の付近では白い綿くずのようなものが来ては去りまた来て去つていた。緑がくろずみ視界が悪くなつたので探照燈をつけると、さきに見えた白いものは恰かも吹雪が舞う如く視界に乱舞し、またボタン雪の如く静かに降つていつた。マリン・ノウまつたくうまい名前をつけたものと感

## 日本海海中の観察と 養殖場としての活用

小寺 周

心する。ふと見ると光に照らされ白つぼく半透明のイカが視界を通つた。前進後退自由自在、釣られてだらりとなつたものからは想像されないほど動作は敏捷、泳ぎ方もスマートだ。やがてどの位時間がたつたものかバチスカーフの降下が停止した。やれやれ待望の大和堆についたのかと思つた

とたん場面は一転、早春の日本海はまばゆいばかりに晴れわたり、冬期間の時化に耐えてきたワカメ養殖施設のブイが無数に入れた時と何等異常がなく春の陽をあび、この通り御安心なさいと云わねばかりに浮いている。施設に付けた種繩のワカメも入れた時にはまだ肉眼でよく見えなかつたものが見事に育ち、荒波にもまれたせいか品質も最高、まずは目出度しと喜こんだところ

で目が覚めた。

この前段は新聞、テレビで科学技術庁が六〇〇米潜水出来るバチスカーフを作ることを知つたのと、くろしお号で潜水した時の記憶がごつちやになつたもの。後段は冬期間北西の季節風が強いため、養殖場として利用されていない日本海の海面を自然的条件が不利なので養殖は不可能な宿命にあるとあきらめず何とか活用したいと考えており、まずワカメ養殖を成功させたいと思つているからで、これ等の夢が夢でなく実現する日の早くくることを願つております。

最後に皆様の本年の御多幸をお祈りいたします。  
(筆者・新潟水試場長)

## 増養殖に力を

羽根田 功

明けましてお目出度うございます。今年もどうぞよろしく。

気象庁では今冬も大雪や寒波に見舞われる公算が大きいと警告されながらも越年してみれば意外に平穏な天候で、ここ数年連続した北陸特有の豪雪や寒波に悩まされたことを思えば何と申ししても大変のどかなよいお正月であると言えましよう。

それに今年にはタツ年でタツとは天高く空中を雄飛する巨大な竜のことであるが、この落し子はタツノオトシゴトと称して十二支中でも唯一一つの水棲動物の一種である魚であります。しかもタツノオトシゴは雌が雄の腹にだいている袋中に産卵し雄がこの袋中に産卵された卵を孵化して仔を育てるといふ稀にみる変わった習性をもつております。

このようにタツ年は吾々海の資源を相手にする者にとつては極めて密接な関係があり、目下とる漁業から育てる漁業へと叫ばれている折柄タツノオトシゴの雄の様に卵の受精から稚魚の養育へと増す漁業を進めるためにまことに意義深いものがあると感ぜられます。

本年の当場の事業としましては大体前年通り継続されますが今年には特に目下増殖用小型指導船を建造中で今春より七尾湾を始め、その他各沿岸のワカメ、ノリの増殖、ハマチ、フグ、タイその他魚類の蓄養指導に乗出す決意を新たにしております。

ねがわくは竜の如く資源の飛躍的増加を計り沿岸漁村の経営に寄与することが出来れば幸いに存じます。

今後共に皆様の強力なる御支援を賜りますよう重ねてお願いして止みません。  
(筆者 石川水試場長)

# 的確な漁況予報および 養殖による計画生産

栗田 実

幼い頃、阿漕の浦に行  
んで真緑の海を眺め海の  
彼方にはどんなお伽の国  
があるのだろうか、想  
いを馳せさせたことを覚  
えている。海は何時でも  
夢と希望を我々に託して  
呉れるものだと思う。水  
産知事蛸川さんも去る年  
始めの夢として「日本海  
に白い調査船を浮べ、デ  
ッキで煙草をふかしてみ  
たい。」と語られたが、  
これが正夢となつて我が  
調査船が生まれたのであ  
る。

この白い調査船平安丸も今や三歳となり  
中層魚を夢見更に悲願であるズバリ漁況予  
報を夢見ている。「何時、何処で、どんな  
魚がどれ程獲れるか。」と明快に予報出来  
たなら、漁民は「くらし」の設計ができ生  
活は安定することだろうし、宿命的にみら  
れがちな漁場紛争等悲しい出来事も未然に  
防げるのではなからうか。

海での計画生産が出来、更に陸では流水  
式多角養殖という名の計画生産が出来ない  
ものだろうか。それは、ポンプアップされ  
た海水が沿岸の山腹を豊かに流れその下に  
は黒々としたノリが栽培され、流れ落ちた  
海水はやがて池となりそこにはエビやタイ  
が飼育され、更に流れはアワビやサザエを  
育て、最下流のタンクではタコやナマコが  
が大きくなつており、これらのすべては完  
全に人工管理方式が採られているというも  
のである。

漸く海での計画生産と、陸での魚介藻つ  
くりとを合わせ行なえば漁家経済の高度成  
長はまさに受け合いで、漁民のくらしを守  
る我々のひたすらなる願いは正夢として叶  
えられるのではなからうか。  
(筆者 京都水試場長)

## 技術が行政を 裏付ける能力を

井沢 康夫

「甚だしいかな、吾が衰へたるや、久しく  
復た夢に周公を見ず。」と孔子は、なげい  
たが、風俗たる我、年頭にあたり、周公ど  
ころか、祝酒に酔つて、雑夢すらみず、た  
だ駄眠をむさぼるばかりである。  
「一年の計は、元旦にあり」といい人並に  
これからの一年の行先を考えないわけでは  
ない。とくに兵庫県の後進地といわれ但馬  
の漁業の夢を大きく持たねばならぬと思  
う。

但馬には、昨年、多年の夢であつた但馬  
漁業センターが同地区の漁業関係者の協力  
の下に、大きな期待をになつて香住町に完  
成した。漁業センターの性格は所謂「水産  
会館」的なもので但馬地区の漁業団体、行  
政機関等の事務所にすぎないが、水産試験  
場も、その内に入った。最初の目標は水産  
試験場の分場をセンターのなかに置いて、  
人員、設備等、文字通りの分場を考えたが、  
これは財政の現状では無理で津居山にあつ  
た。兵庫丸事務所がセンターの内に移つた  
にすぎない。しかも水試がセンターの内に  
入つたことは、大いに意義があるものと考  
えている。従来から、水試が水産行政のア  
クセサリー的な存在で、ほんとうの「緑の  
下の力もち」であればよいのだが、存在価  
値の低いもので、漁民から浮いた存在にな

つていことが、否定されえない。  
漁業者の眞の声をきき、行政と一体とな  
つて試験研究を進めてゆく素地が、水試が  
センターの内に入るることによつて出来たも  
のと思う。水産行政は、あくまでも技術行  
政である。技術が行政を裏付ける能力を早  
く確立してゆきたいものである。今年から  
センターの内の水試はこの方向に努力して  
ゆくつもりである。  
(筆者 兵庫水試場長)

辰年の年頭に入がく私の夢は対馬暖流の  
果てをこの目で見きわめたいことである。  
対馬暖流の果てとは云つても宗谷海峡を指  
すのでもなければ大和堆をいうのでもなく  
実は東鮮暖流々域のことである。

## 韓国東海沿岸の調査

神藤 正

鳥根県は韓国とは地理的に  
最も近いし神代の昔から人の  
往来が頻繁で特に漁業の面  
では操業海域が連続しているた  
め極めて密接な関係があり国  
交の杜絶している今日でも季  
節風により漂着する韓国漁船  
は毎年十数隻にのぼり暖流の  
彼方の消息もおぼろげながら  
判つてい。私の夢というべ  
き念願はこの韓国東海沿岸即  
ち東鮮暖流々域に誰よりも真  
つ先に試験船鳥根丸を乗り入  
れてイワシ、サバ、サンマ、  
スルメイカ、スケトウ等の資  
源の状態を調査し、いささか  
なりとも日本海漁業の発展に寄与したいこ  
とである。

ところで十年交渉と云われた日韓国交正  
常化も昭和二十七年の第一次正式会談から  
数えるとなつて今年で十三年目になる。  
このように交渉が長引くのは、勿論韓国に

おける政治経済の貧困と日本に対する不信  
感によるものであろうが一昨年は大平、金  
会談で、あれほど難問であつた請求権の額  
もまとまつたようなので、あとは漁業問題  
だけが重要議題として取残されているのみ  
である。さいわい韓国の総選挙もおわり民  
政移管も実現したので、この際日本海にお  
ける水族の豊庫東鮮暖流々域を、双方が善  
隣互恵の精神をもつて共同で開発しその漁  
利を平等に分ち且つ永續させるために専管  
水域規制水域及び漁業協力等の問題を大所  
高所から総合的に検討してすみやかに交渉  
妥結に達せんことを切に望むものである。  
(筆者 鳥根水試場長)

## 日本海の海底を観賞

吉津 網人

心地よい夢 はかない夢 思い出せない  
夢 さかさ夢 夢の又夢 等々夢には様々  
ござる事で、これこそ無制限の世界であり  
ますれば現実ばなれした国づくりの神々の  
世界の夢を見た処で、お叱りを受けたり、  
バチがあつたり等は決して夢にはなから  
うし、またあつた処で夢だから気にしない  
事にして

さて対馬海峡、津軽海峡、宗谷海峡、そ  
れに間宮海峡なるものを、それぞれ仕切り  
して日本列島を一またぎする大ホースの列  
を、しき海中生物の奴さん達には誠に気の毒  
ではあるが、海水と共に瞬時にして太平洋  
に移住を御願ひする干拓を行なえば、世に  
も不可思議な日本海底の秘境が、そこに忽  
然として出現し、この秘境を心ゆく迄感賞  
しながら、宇宙の悠久の世界に戯れる営み  
をやれば、さぞかし国づくりの神々の世界  
の心境を、思う存分に逍遙する事が出来る  
だろう。  
アーアー、夢でも良いから見てみたい。  
(筆者 山口水試場長)

# 地方水試と人事管理

尾 島 雄 一

1、最近新書版ブームで汽車にのると週聞誌に代わつて新書を手している人が多くなつた。流行におかれてはならじとの気持からでないが、出張の車中でたまたま手にした坂本藤良著「経営学入門」カッパブックスから興味が出て、手あたり次第に経営と名のつく関係の新書を読んでいるうちに経営又は組織の中における人事管理の良し悪しとその経営体又は組織の成長に大きく影響している。極言すると、現在、繁栄している企業体は戦後の早い時期に近代的人事管理の方向に切り替えた企業体であるということがわかつた。乱読しているなかには今でも印象にのこつている事柄が多い。1、2、の例を上げてみると太平洋戦争におけるミッドウェー沖の大敗は、帝国海軍の人事管理の悪さ、即ち専門家を指揮官にせず、年功序列によつて航空戦専門家でなかつた南雲中将を司令官においたため、彼の配下にあつた源田参謀や草鹿参謀長などの航空戦専門家の進言を受け入れなかつたことが原因であると述べられてあつたことであつた。「戦は国の大事なり」と孫子の冒頭に書かれてある通り重大な運を左右する海軍の人事管理の古さから大敗を喫したということは、勿論これだけが原因ではないにしろ、まことに長恨の極みである。

また、「人の能力を伸す早道は、ときどき仕事をかえることである」とか「二年た

つたら再検討、五年たつたら疑え。十年たつたら捨ててしまえ」という言葉も印象的であつた。要は人の能力は同じ所に長期間いるより時々部署をかえて精進の気持を持ちつつ能力を開発した方がよいということ、前者は「人の能力」の面からの表現であり後者は、「仕事の質」からの表現であると言えよう。

いずれにしろ個人の能力の発揚からみても、組織の成果からみても人事管理の重要性を説いている言葉である。

2、我々がある組織を作る場合には勿論組織の目的がある。即ち合目的に組織を編み出す必要があるが、その組織内においてその組織が編み出した人の意図通りに動くかどうかは組織を構成している個々の人、如何による。

ここに組織における人事管理の重要性がある。組織の目的を十二分に發揮出来ることはその組織にとつて社会性を増す所以であるばかりでなく、個人にとつてもその持つ能力を最大限に發揮し得る道でもあるわけだ、人事管理の良し悪しは個人のモラル(職場志気)及び組織の成果に重大なる影響を持つことは当然のことであろう。

3、このような気持から現在の地方水試の人事管理をながめてみるとまことに寒い感じがするわけである。本県の水試だけを眺めてみても大凡次のような問題を持つて

① 水産技術者の配置は水産課又は水試がその職場の大部分であるので極めて人事は停滞している。この停滞の中には地域的(空間的)ともいうか)な立場からの停滞と、年令的(時間的)ともいうか)な立場からの停滞との両面があるようである。先に引例した言葉によると個人のためにも水試のためにも極めてよろしからざる人事管理といわざるを得ない。

② 地域的な関係も手伝つて比較的同一年校卒業者が多いことも一つの問題点といえよう。セクシヨナリズムとか学校間とかいうことでなくて、先程の引例の南雲中将と、源田参謀の例えにならないとも限らないのである。

以上は本県の水試の人事管理における問題点であるが、これは一般的に地方水試にみられる共通の問題点といえよう。4、しからば、これらの水試共通の問題点についてどのような打開策があるであろうか。

これを述べる前に建設省―各県土木部の人事管理面をざつと述べてみよう。建設省は御存知のように戦前は内務省であつたので一元的に内務省において人事管理を行なつてきた。その伝統が今も受けつがれこれに新しいセンスを注入して人事管理を行なつて

即ち、建設技術者を行政、研究と交流せしめ、また、本省と地方庁と交流せしめるために、建設省内の官房に技術参事官をおいてこの参事官室において一元的に人事の交流を実施している。これと大体似た組織をもつてい

そこで前述の水試の人事管理の問題点から地方水試も県という拡がりよりもつと広い日本海ブロック又は国の拡がりにおいて人事の交流を行なう必要があると思うわけである。

即ち、地方庁と国の機関との交流、地方庁相互の交流が必要であると思う。更に、新しく技術者を採用するに当つては、長期的な見通しから、同一学校にかたよらず、年令、学歴、などの世代のバランスなども考慮する必要があると思う。

そして第一段階としてこれの実現のためには、やはり地方庁から、国に対して、このような人事管理の世話をしてもらいたいという意志をはつきりと提言すべきではないかと考える。例えば「全国水試場長会」あたりで水産庁に対して、地方庁と国の機関との交流、地方庁相互の交流について、国が世話し得る職(例えば建設省で云えば技術参事官室)の新設を要請するのも一つの道ではないかと考える。あるいはその前に、ブロックの水研の所長さんあたりがその代役をやるべきなのかも知れない。最近私は、「研究者は量でなくて質である」ことを痛感している。(新潟県水産課長)

## あとがき

年頭にあたり本誌に対する旧来の御支援を深謝申し上げます。

今後とも卒倍旧の御協力を賜わりたくお願い申し上げます。